

まだ一つだけ欠けたものがある

ルカ福音書18:18-23

18:18 またある役人が、イエスに質問して言った。「尊い先生、私は何をしたら、永遠のいのちを自分のものとして受けることができるでしょうか。」

18:19 イエスは彼に言われた。「なぜ、わたしを『尊い』と言うのですか。尊い方は、神おひとりのほかにだれもありません。」

18:20 戒めはあなたもよく知っているはずですが、『姦淫してはならない。殺してはならない。盗んではならない。偽証を立ててはならない。父と母を敬え。』

18:21 すると彼は言った。「そのようなことはみな、小さい時から守っております。」

18:22 イエスはこれを聞いて、その人に言われた。「あなたには、まだ一つだけ欠けたものがあります。あなたの持ち物を全部売り払い、貧しい人々に分けてやりなさい。そうすれば、あなたは天に宝を積むことになります。そのうえで、わたしについて来なさい。」

18:23 すると彼は、これを聞いて、非常に悲しんだ。たいへんな金持ちだったからである。

【祈りながら考えよう】

- (1) イエスの所に来た役人はどんな人ですか。
- (2) この若い青年の「尊い先生。私は何をしたら、永遠のいのちを受けられることができるでしょうか」という問いかけのどこに問題がありますか。
- (3) 永遠のいのちを受けられる道は何ですか。

【解説】

(1) 富める青年

①熱心な態度で身を低くしてやって来た

今日の箇所は、前回の学びの箇所と関係がないように見えるが、大いに関係がある。18章17節に、「まことに、あなたがたに告げます。子どものように神の国を受け入れる者でなければ、決してそこに、入ることはできません」と、幼子以外の心では、神の国と決してつながるものではないということが語られた。

イエスが幼子について語っておられた時に、「またある役人が、イエスに質問して言った」。そこへ一人の役人がやってきた。会堂の管理者である。ユダヤにおいては、ユダヤ人は会堂を中心にして生活している。会堂管理者はユダヤ人の中では尊ばれた地位にある者である。

マタイ福音書、マルコ福音書を参照して見ると、この役人は若い青年であり、金持ちであった。この人は幸せな存在に見える。人から尊ばれる地位があり、お金もあり、財産もある。さらに若い。三拍子揃った幸せな姿である。

マルコ10章17節には、「イエスが道に出て行かれると、ひとりの人が走り寄って、御前にひざまずいて、尋ねた」とある。この役人は走って来た。イエスの所に来るや、土下座してイエスに尋ねた。この役人がいかに熱心な態度で、しかも身を低くしてイエスのもとにやって来たかということが分かる。

②永遠のいのちが欲しい

《尊い先生。私は何をしたら、永遠のいのちを自分のものとして受けることができるでしょうか》

イエスを《尊い先生》と呼んでいる。また《何をしたら、永遠のいのちを受けられますか》と、この問いかけはうっかり読んでではない所である。イエスはこの問いかけを正しておられる。

(2) 尊い方は神おひとり

イエスは彼に言われた。「なぜ、わたしを『尊い』と言うのですか。尊い方は、神おひとりのほかにだれもありません。」

この青年が、《尊い先生》と問いかけた時、神の国につながっている良き人の姿を、このイエスに見ていたと言える。理想的な善なる人間としてイエスを見ており、このお方に尋ねたら、自分も何をしたら、永遠のいのちを得られるか、神の国に入ることができるかを教えてもらえると思って来た。

残念ながら、この青年の考え方は間違っている。どんな人間の中にも、良きものを見いだすことはできない。ロマ書3章10節以下において、《義人はいない。ひとりもない》《善を行う人はいない。ひとりもない》と断定されている。神からご覧になって人間の中に義なる者、善なる者はひとりもない。しかしこの青年はその善を求め、それが得られると考えて来た。イエスをその善なる人と見た。

確かにイエスは善なる存在であった。善そのものの具体的な現れである。神の絶対義、神の完全が具体的に見える姿において現れている方である。

しかしイエスは、《なぜ、わたしを『尊い』と言うのですか。尊い方は、神おひとりのほかにだれもありません》と語られたのか。それは今述べたような事情である。青年が、《尊い先生》とイエスに呼びかけたのは、どこまでも人間としてその善に達し得た人、そういう先生として、イエスに求めてきた。イエスは、そんな者は人間の中に一人もない、尊い方は神おひとりであると言われた。永遠のいのちを求め、神の国を求め、方向違いを正された。

(3) 人の行いは神の国に無関係

人間の善の行いにおいて神の義に達し得ると考えているから、何をしたらと尋ねている。神の国はどんな人間の行為や努力にもよらない世界であるということが、まずここではっきりされている。

《なぜ、わたしを『尊い』と言うのですか。尊い方は、神おひとりのほかにだれもありません》。このイエス様の言葉を浅く受け取って、「イエスは自分自身を完全な尊い方とは認めていなかった、だからイエスは完全無欠な神の御子、神と等しい神の現れではなくて、やっぱり同じ人間なのだ」と、「イエスの神性」を疑う神学者や聖書学者がいる。それはイエスの御言葉に対する浅薄な解釈である。

ヨハネ福音書や他の書から総合して読むと、イエスはご自分に罪があるとっておられる所は一つもない。わたしと父とは一つである、神の意志がそのままイエスに現れ、イエスの行動は神から出ているものであると記されている。

イエスに対して尊い先生と呼ぶ方向の間違い、それをイエスはこういう言葉ではっきりと正された。私たち人間は生まれながらの罪人である、だから人間の行いによって神の善に達し、神の国にあずかろうというならば、人間一人も神の国にあずかることはできない、全く不可能だということを、はっきり知らねばならない。

(4) 戒めは守っている

《戒めはあなたもよく知っているはずですが》。神の戒めは律法である。十戒は神の義が、神の善が現れているもの。彼は会堂の役人、律法については専門家である。だからイエスは言われた。

《戒めはあなたもよく知っているはずですが。『姦淫してはならない。殺してはならない。盗んではならない。偽証を立ててはならない。父と母を敬え。』。すると彼は言った。「そのようなことはみな、小さい時から守っております。』。

マタイ福音書19章16節から読んで見ると、《すると、ひとりの人がイエスのもとに来て言った。「先生。永遠のいのちを得るためには、どんな良いことをしたらよいのでしょうか。」イエスは彼に言われた。「なぜ、良いことについて、わたしに尋ねるのですか。良い方は、ひとりだけです。もし、いのちに入りたいと思うなら、戒めを守りなさい。」

彼は「どの戒めですか」と言った》。

良い事、それは神の戒めの中に全部表れている。神の善なる意志はそこに表されている。その戒めを守りなさいとイエスは言われた。するとこの青年は即座に言った、「どの戒めですか」。

この青年が小さい時から戒めを教えられ、その戒めをよく守ってきた。自信を持っていた人だということがわかる。一生懸命戒めを守ってきた、いったいどの戒めが私が守っていない戒めがあるだろうか。そういう気持ちがあればこそ、イエスが戒めを守りなさいと言った時に、それはどの戒めのことでかと尋ねた。自分は守っているつもりだ。

《姦淫してはならない。殺してはならない。盗んではならない。偽証を立ててはならない》

これは十戒のうちの対人関係の戒めであり、一言で言えば、《自分を愛するように、あなたの隣人を愛しなさい》という「対人関係の戒め」を言われている。この戒めが守られていくなれば、対神関係、神に対する戒めは当然守られているはずである。

(5) 浅い律法解釈

《姦淫してはならない。殺してはならない。盗んではならない。偽証を立ててはならない。父と母を敬え》、これは十戒の最初の対神関係の戒めの後にある戒めである。この青年は即座に、それを私は小さい時からみんな守っておりますと言った。ここに、同じ戒めに対するにも、この青年の戒めの「解釈の浅さ」が見られる。人間的な標準における神の戒めの解釈である。姦淫という形において外に現れなければいい、殺すということにおいて外に現れなければいいということである。盗みも、偽証も、父と母を敬うことも同様である。

しかし真の神の戒めの解釈は何か。それはイエスが「山上の垂訓」の中で語られたあの解釈である。それこそ神の標準において、神の戒めをそのまま解釈した解釈である。人間の解釈は人間の基準において律法を読み、解釈している。この青年は「人間的基準において」解釈し、私は小さい時からそれはみんな守っておりますと言った。

(6) イエスの律法解釈

イエスの解釈はどうか。マタイ福音書5章21節以下、これが神の基準における律法の解釈である。

《『姦淫してはならない』と言われたのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。だれでも情欲をいだいて女を見る者は、すでに心の中で姦淫を犯したのです。もし、右の目が、あなたをつまづかせるなら、えぐり出して、捨ててしまいなさい。からだの一部を失っても、からだ全体ゲヘナに投げ込まれるよりは、よいからです。もし、右の手があなたをつまづかせるなら、切って、捨ててしまいなさい。からだの一部を失っても、からだ全体ゲヘナに落ちるよりは、よいからです》(マタイ5:27-30)

これもまた殺しの場合と同じように、心の出来事である。心にいやしい思いを抱き、情欲を抱き、しかも外はつくり、きれいそうな格好をし、きれいそうな顔をしている。その偽りこそ神の前に正されなければならない。

外に現れなければいいんだという、それは人間の低い基準における解釈である。神の完全義より現れた、完全善から現れた神の戒めは、そんな低いものであるはずがない。これが神の基準における律法解釈である。

《昔の人々に、『人を殺してはならない。人を殺す者はさばきを受けなければならない』と言われたのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。兄弟に向かって腹を立てる者は、だれでもさばきを受け



なければなりません》。兄弟に対して腹を立てるということは、すなわち人を殺したと同じ裁判、同じ死の判決を受けなければならない、ということである。

《兄弟に向かって『能なし』と言うような者は、最高議会議に引き渡されます》。裁判とはいわば地方裁判、議会というのは最高裁判で、罪がもっと重い。

《『ばか者』と言うような者は燃えるゲヘナに投げ込まれます》。だんだん審判が重くなっていく。兄弟に対して腹を立てる者、それは殺す者と同じ裁判を受ける。『ばか者』呼ばわりする者はゲヘナの火に投げ込まれる。

人を殺すということは、肉体を殺すという行為だけではない。問題はその内側の動機である、心である。人間の基準における殺すということであれば、それは外に現れてのこと、人間が相対の間で作る殺人の法律である。しかし神の前にはそんな程度の低いものではない。神は心を見られる。

殺しはどのようにして起こるのか。人に対して腹を立てる、その怒りがはすみをもって人を殺すことにもなる。人を憎む、そのことが元になって人を殺す。怒り、憎しみ、これは殺人以前の殺人、神の前には殺人と同じである。

兄弟を『ばか者』という、それは人を無視すること。神は、人に無視されるような「いと小さい者」の上にこそ、ことさらにあわれみをかけてくださるお方である。それを人間的に判断して、無視する、『ばか者』とする。これは神に対しては、その者を抹殺する、殺すと同じことである。

このように外に現れない罪こそ、神の前にはまことに重い罪である。外に現れ、人を殺したということになれば、この世で制裁を受ける。人殺しの罪に問われて、その人はその罪の報いを身をもって受けなければならない。しかし心でやった者は人の前には現れず、善人顔をして、なんの制裁も受けない。

人を殺した者は、自分が殺したというその思いにとらわれ、苦しむ。しかし外に現れなければ、自分はそんな人殺しではない、人なんか殺したような者とは違う、という思い上がりがある。これは心を見られる神を侮ること。その者は議会議に渡される。ゲヘナの火に投げ込まれる。これがイエスの律法判断、神の基準における律法の解釈である。

この青年の解釈は、当時のパリサイ人にしても、律法学者にしても、低い人間の基準、標準に引き下ろされた神の律法解釈における実行であった。だから神の善、神の義のままの現れであるイエスが現れて、これをはっきりと明らかにされなければならない。それが山上の垂訓である。

(7) 律法の一点一画もすたれることはない

マタイ福音書5章17節以下に言われている。《わたしが来たのは律法や預言者を廃棄するためだと思ってはなりません。廃棄するためではなく、成就するために来たのです。まことに、あなたがたに告げます。天地が滅びうせない限り、律法の中の一点一画でも決してすたれることはありません。全部が成就されます》。

人間は、律法の一点一画を自分の標準に低く変える。この一画ぐらいいはちょっと丸くなくてもいいだろう、この一点ぐらいいはなくてもいいだろうと変えてしまう。しかし、神の御子イエスは、神の完全を完全のままに見られる、完全のままに現されるお方である。

私たちは、キリストは恵みのお方だ、キリストは恵みをもっておいでになられたお方だ、赦しのキリストだということで、神の完全をいかにげんなものと考えやすい。神の完全を侮ってはいけない。キリストはまずその神の完全を現されたお方である。

(8) あなたには、まだ一つだけ欠けたものがある

《すると彼は言った。「そのようなことはみな、小さい時から守っております》。何と低い律法解釈であろうか。自分は戒めを守っていると思っているのに、なお平安がない。当然である。

《イエスはこれを聞いて、その人に言われた。「あなたには、まだ一つだけ欠けたものがあります》。ここでマルコ福音書の10章21節を見ると、《イエスは彼を見つめ、その人をいつくしんで言われた。「あなたには、欠けたことが一つあります》、と言われている。イエスが厳しいお顔で語られたのか。そうではない。この青年にいつくしみの目をとめ、やさしい目をとめ、おもむろに語られた言葉である。ここを見落としてはいけない。

この青年は、その当時の律法の学者たちの説く基準において律法を考え、守ってきた。低い基準において自分は律法を行っておりますと言っても、そのせつないほどに求めている姿は、イエスにはまことに優しい心をもって、思いやりの心をもって、いつくしみの目をとめられる出来事であった。イエスはその青年の心を思って、《イエスは彼を見つめ、その人をいつくしんで言われた》のである。

《あなたには、まだ一つだけ欠けたものがあります。あなたの持ち物を全部売り払い、貧しい人々に分けてやりなさい。そうすれば、あなたは天に宝を積むことになりす。そのうえで、わたしについて来なさい》。

自分はもう何もかもやっているのに、まだ永遠のいのちの確信が得られない、どこに欠点あるか、ということを見てとって、そう語られた。持っているものをみんな売れなさい、そして貧しい人々にみんな分けてやりなさい、と。

これはこの青年にとってはまことに致命的な言葉であった。今まで自分は、そんな物にこだわり、とらわれているとは思っていなかった。たしかに財産家であり、大金持ちである。けれども適当に貧しい人に施していた。

けちで一銭も出すことを惜しんで金を貯めているような、そういう金持ちではなかったであろう。金持ちの家に生まれ、金持ちの家で育ち、おそらくもう親の遺産か何かを受け継いでいたであろう。

その金は、律法を守ってきた青年であるから、貧しい者を見れば適当に施しもしてきた。お金や持ち物に執着しているとは思わなかった。人一倍の施しをしたであろう。しかし、その施しは自分の持ち物にさしつかえのない程度で施

ていた。自分もいい事をしているんだ、施しをしているんだ、善なる行為をしているんだと、自分の満足になる。

イエスは、《あなたの持ち物を全部売り払い》、全部売り払ってと言われた。適当にはない、全部である。ここにこの金持ちの青年の致命的な大問題があった。人間誰でも自分の持っているものを適当に与えることはできる。しかし全部となれば、これは大問題になる。この青年は、全部売り払って貧しい者に分けて与えてやりなさいと言われて、そこではじめて、自分自身がいかに物を大切に、物をしっかり抱いてきた者かということが心底わからされた。

(9) 神と富とに仕える悩み

イエスは、《あなたの持ち物を全部売り払い、貧しい人々に分けてやりなさい。そうすれば、あなたは天に宝を積むことになりす》と言われる。天に宝、永遠のいのちを持つことができるようになるということである。

《そのうえで、わたしについて来なさい》。キリストにつながるということである。キリストにつながることを妨げるものは、持ち物である。《あなたがたは神と富に兼ね仕えることはできない》とあるが、この青年の悩みは、すなわち神と富とを両方持っていていこうとするところにおける悩みであったということが、ここにはっきりした。

彼は神の戒めを一生懸命守ってきたと思っていた。しかし同時に彼は自分の持ち物、財産を大切に守ってきた。神と富とに仕えてきた。それは真の神に対する仕えではない。本当の神の戒めを守る守り方ではなかった。すなわち適当な神への仕え、適当な律法の守り方であった。イエスはその問題をここにはっきりとなさした。

(10) 致命的な出来事を示されて

その時、この青年はどうしたか。《すると彼は、これを聞いて、非常に悲しんだ。たいへん金持ちだったからである》。彼はイエスの足もとに身を投げ出して、どうか教えてください、何が何でも私は永遠のいのちを受けたいと一生懸命求めて来た。しかし、マルコ福音書10章22節を見ると、《すると彼は、このことばに顔を曇らせ、悲しみながら立ち去った》とある。

この青年はイエスの所に来る時には、希望をもってやって来た。ところがその望みは全く頭からつぶされてしまった。望みを抱いて来た顔とは全く別な、真っ暗な顔になって、顔を曇らせ、悲しみ泣きながらイエスのもとを去って行った。

あんなに永遠のいのちを求めていただけに、今のこの致命的な出来事を示された時、富める青年はどうしようもなかった。彼は財産というものとらわれていたことがはっきりした。

そこである解釈者は、神の国に入るには、イエスがおっしゃったように、この青年が持ち物をみんな売り払って、手ぶらになって、イエス様の弟子になって、イエス様に従っていくことで神の国に入れるのだと、そういう人間の働きで神の国に入れるような方向に解釈していく。

そう解釈したら、幼子の心でなければ神の国は決して受けられない、と語られたイエスのお言葉と食い違ってくる。そうであれば、神の国に入るには、人間の努力によらなければならない、ということになる。

イエスはそういうことを言うために、このように富める青年に語られたのか。それならばこの青年が、自分が良き者になって、自分の行いで、働きで、神の善なる意思にかなう者となって、神の国に入ると願ってきたその願いと同じ方向において、イエスがここで答えられたということになる。そういうふう解釈したら、24節以下に続く言葉もわからなくなり、前の所の幼子の出来事においてイエスが語られた言葉とも、この出来事はつながらなくなる。

(11) 神の国に対し絶望の存在

イエスは、人間の可能性、自分の働きで神の国に達しようとする、神の善に自らの善を達せようとするその思い、あるいは思い上がったこのこの思いを徹底的に頭からたたきこわすために、この役人にとっては致命的な出来事を指し示されたのである。ここが大切な所である。神の国は、爪の先ほども、人間の可能性で達するものではない。神の国はそんな生やさしい世界ではない。

この青年はここで、今まで永遠のいのちを受けようと努力したその努力を、頭から全部否定されてしまった。望みのない者になった。彼は捨てることが出来ないほどに執着している自分の持ち物の場に帰って行くしかない者であった。この富める青年は、神の国に対して全く絶望の存在である。

(12) このままであわれんでください

ルカ18章13節の所で、あの取税人の姿を学んだが、《ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようとせず、自分の胸をたたいて言った。『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。』》。

この取税人は、自分自身を見れば何1つ期待をかけることの出来ない者、頭の先から足の裏まで全部罪に破れ果てた者、神の国とは全く無関係な者、しかし神様にあわれんでいただきたい。そのままの姿で、ただ主の前に身を投げ出し、どうかこの者をあわれんでくださいと言うしかない者であった。そこにキリストの救いがある。

だからこの時、大金持ちのこの青年はひとたび自分の持ち物の場に帰って行ったが、そこで今までの間違いを認め、自分の思い上がりを認め、自分ではこの持ち物を捨てることも出来ない、しかしなんと少しでも救っていただきたい、このどうしようもない者を、どうかこのままで救って下さい、このままであわれんで下さいと、その破れたままの姿でもう一度イエスのもとに来て、今度イエスの足もとに身を投げ出した時、そこに神の国は圧倒的に与えられる。自分の働きではない、何をしたらではない。手も足も出ない破れ果てた罪人に対する福音である。

イエスは幼子を抱き上げて、その上に手をおいて祝福された。そこで幼子は何をしているか。よごれている体か、きれいか、そんなことはどうでもいい、その存在全部をイエスの手にあずけ、イエスのただ一方的な祝福を受けている。これが神の国の出来事である。

